諏訪神社例大祭(秋祭り)について

諏訪神社は、深谷市小前田地区の鎮守様として今でも地域の人たちに大事にされています。この神社は、その昔この一帯を支配していた武蔵七党の一党猪俣党の藤田氏が領地と領民の安寧のために信濃国の諏訪大社より正一位南宮法性大明神の分霊をお祀りしたのが始まりと伝えられています。その後一時さびれましたが、長谷部兵庫亮吉長という人が現在の位置に移して再興して現在に至るということです。

諏訪神社の御輿

この諏訪神社の例大祭は毎年10月15日に行われていましたが、近年は地域の人々が参加しやすいように10月上旬の週末に行われるようになりました。古老の話によると、上町・中町・本町の三台の祭屋台が宿通り（秩父往環）を曳き回されたときは、秩父夜祭りと並ぶような賑やかなお祭りだったということです。

諏訪神社社殿

また、それぞれの屋台には芸座（げいざ）と呼ばれる脇舞台が付き、その上で般若座（小鹿野町）を呼んで歌舞伎芝居などが行われた記録が残っています。

花園周辺マップ

■交通のご案内

［自動車ご利用の場合］

関越自動車道花園インターチェンジより約２分（1.5km）
熊谷から国道140号線で約30分（15km）
甲府から雁坂トンネル秩父市経由で国道140号線２時間20分（約100km）

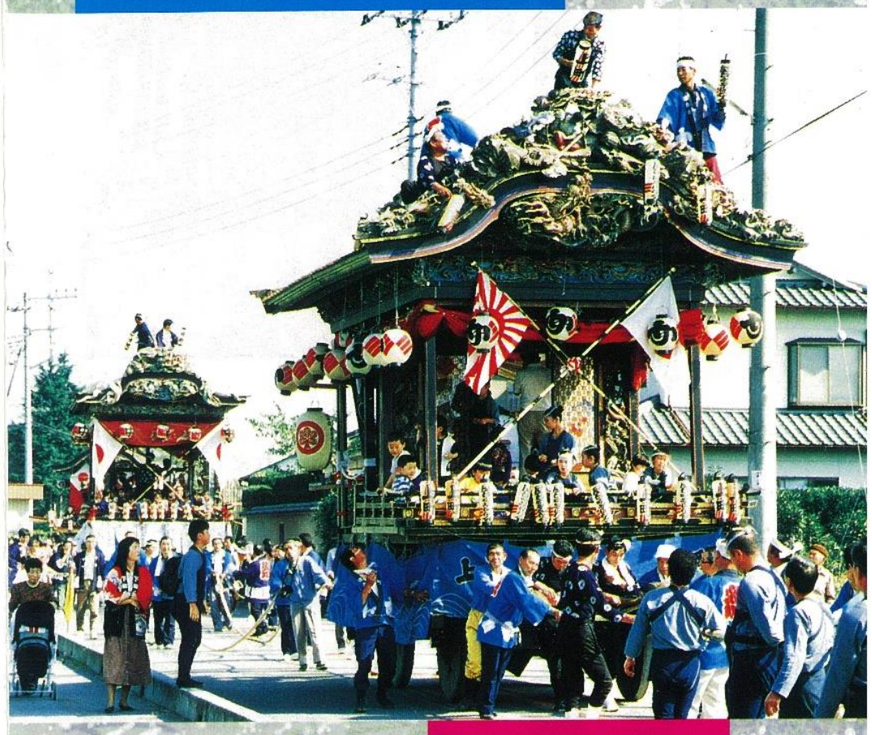
［鉄道ご利用の場合］

秩父鉄道小前田駅下車、徒歩約15分

彩の国さいたま

深谷市指定文化財

小前田祭屋台



深谷市

上町の祭屋台

■上町の屋台について

小前田上町の屋台は明治6年(1873)に造られました。製作者は、地元に残る文書から大工は小前田村藤井作之助、彫工は弥勒寺音八・諸貫万五郎とわかっています。屋台の構造は、四車輪向唐破風板屋根造りで、唐破風は大振りに仕上げてあり、中町・本町の破風とは異なります。屋台前部は三方に勾欄を持つ舞台、後部は囃子座となっています。屋台前後には雲形の彫刻を施した反木が貫通しており、車輪の直径は約1.2mと他の屋台に比べ大径のものを使用しています。また、後部には車体を回転させるためのオダマキと呼ばれる巻車が付き、秩父の屋台と同様に車体を浮かせて方向転換をすることができます。屋台の規模は間口4.25m×奥行5.50m×高さ5.30mを測り、重量は約3.5トンです。

正面鬼板の彫刻は、躍動感のあるヤマタノオロチを退治するスサノオノミコト。後鬼板には林和靖と唐子が彫られています。

中町の祭屋台

■中町の屋台について

小前田中町の屋台は明治4年(1871)に造られました。大工は地元に残る文書から秩父山田村(現秩父市)の荒木和市（秩父夜祭りの屋台製作者の一人）であることがわかっています。彫工は不詳ですが、彫られている彫刻の特徴などから本町の屋台と同様に飯田岩次郎系の門人である彫工と思われます。屋台は、四車輪向唐破風板屋根造りで、前部が三方に勾欄を持つ舞台、後部が囃子座になっています。また、車台部が上下二分割され、中心軸で屋台上部が回転する構造になっています。屋台の規模は間口4.00m×奥行5.40m×高さ5.90mを測り、重量は約3.0トンです。

正面鬼板の彫刻は、やや小振りですが目貫龍が、後鬼板には応婦人(※)が彫られています。

※応婦人は西王母の侍女で琴の名手と言われ、和楽器を扱う人たちの信仰がある。また、龍に乗って飛行したと言われている。

本町の祭屋台

■本町の屋台について

小前田本町の屋台は三台の屋台の中で一番古く、明治元年(1868）に造られました。彫工は地元に残る文書から、川原明戸村（現熊谷市）の飯田岩次郎とわかっていますが、大工は不詳です。しかし、正面の障子の上に虹梁が見られることなどの特徴から中町屋台と同じ荒木和市の製作であったと思われます。屋台の構造は四車輪向唐破風板屋根造りで、上町・中町に比べるとやや簡素です。唐破風は全体に丸みを帯びており、江戸末期の様式を示しています。屋台前部は舞台となり後部には囃子座が付いています。また、車台部は上下で二分割され、中心軸で回転する構造となっています。屋台の規模は間口 4.23m×奥行6.00m×高さ5.45mを測り、重量は約3.5トンです。

正面鬼板の彫刻は、目貫龍と龍が、後鬼板には獅子に牡丹が彫られています。